

——一番高くへ——。

頂上決戦



高校サッカー大特集

BATTLE AT THE TOP

プロか、大学か、高校が最後か。歩む道は異なっても、
思いは1つ。「一番高いところ」をつかむ最終決戦。

——スタンダード新潟編集部





撮影●井上和男(編集部)

渡邊 黎優

(FW)

新潟工業 3年 176cm/69kg [前登録チーム] Noedegrati Sanjo FC

古豪復活の鍵を握るエースストライカー。2年まで中盤だったが3年からFWに転向し才能が開花。一瞬で相手の裏を取る初速の速さと強烈な左足でゴールを狙う。目標は全国大会出場と得点王。「私立を全部倒したい」。ケガで欠場した県総体の分も大暴れを誓う。



撮影●井上和男(編集部)

清水 昊

(FW)

加茂暁星 3年 180cm/70kg [前登録チーム] Primasale上越JY

中学時代はサイドバックだったが、高校入学後、2年の夏からFWに転向。亀田陽司監督は「身体能力の高さは全国でもトップクラス」と高く評価している。粗削りな分、プレーの細かさはいま1つだが、最後まで裏を狙って走り続ける馬力と、ゴールへの意識の高さは群を抜く。

Akasaka Kazuki

赤阪 和輝

(DF)

日本文理 3年 178cm/67kg [前登録チーム] アイデンティみらい

1年からベンチ入りし、2大会前の全国16強を知るセンターバックが、主将として最後の選手権に臨む。ボールを奪うための体の強さ、タイミング、技術が光る守備職人。スピードを生かしたカバーリングでも最終ラインを支える。ベルギー代表MFケヴィン・デ・ブライネを参考にしているという攻撃参加も魅力の1つ。多彩なキックを駆使し、相手が嫌がるスペースにボールを落とす。また相手が間合いを取れば自らドライブし、強烈なミドルシュートを打ち込む。攻守で背負う責任は大きい、「今年の3年生は全員がリーダーシップを取ってくれて助かっている。面白い大会にできる」。心強い仲間たちと、最後の頂を目指す。

撮影●井上和男(編集部)



Kobayashi Haruki

小林 脩晃

(GK)

帝京長岡 3年 178cm/71kg [前登録チーム] FC東京U-15むさし

シュートストップとビルドアップを得意とし、現代サッカーに適した守護神。クロスへの対応も判断良く、果敢に飛び出す。PKに絶対の自信を持ち、今夏のインターハイ準々決勝の青森山田戦では、1本を止めて県勢初の4強進出の立役者となった。1年の後半からゴールマウスを守り、経験は豊富だ。



撮影●渡邊俊介(フリーランス)

僕の高校サッカーを語ろう。

一番高くへ
頂上決戦
BATTLE AT THE TOP



千葉 和彦

Kazuhiko Chiba

「アルビレックス新潟 DF」

自分の殻は自分でしか破れない。とにかくぶつかっていいしてほしい。

今の時代では想像できないほどの厳しい環境、激しい練習にとつぱり浸かっていた高校生活。「今は分からなくてもいつか答えが出る」。ポジティブな性格そのままのエールを高校生たちに送る。

撮影◎井上和男(編集部) 文◎小林忠 目次ページ 新潟県

寮から出て下界を見られるのは遠征の時だけ(笑)

——千葉選手は三重県の津市立橋北中学校から日生学園第二高校(現・青山高校)に入学されました。

千葉 三重は昔から四中工(四日市中央工業高校)が強くて。そこは当時から100人超の部活で「自分が行っても…」っていう思いがありました。そんな時に中学校の先生から、日生学園第二という高校がサッカー部を強化し始めて全国大会出場を目指しているという話を聞きました。練習に参加したらすごくフィードバックが良くて、僕自身もとても調子が良くて。それで練習後に監督さんから「特待生で」と言われ、入学を決めました。

——当時は超スパルタで有名な高校だったそうですね。

千葉 今ほビインターネットが普及していない時代だったので、僕は知りませんでした。入学が決まってから同級生に「俺、日生学園第二に行くわ」と言ったら、「お前、ダウタウンの浜ちゃん(浜田雅功)が行っていた学校だぞ。聞いたことないの?」かなり厳しい学校だぞ」と教えてくれたんです。「でも俺もう行くなって言っちゃったよ…」って。後に引けない状況を自分で作っちゃいました(笑)。

——サッカー部には県外からも選手が多く集まってきたか?

千葉 他校からのオファーを蹴ってまで来るほどではないし、めっちゃめっちゃうまい子が来たわけでもありませんでした。全寮制で四六時中みんな一緒だったので、チームワークの良さはとてもあったと思います。

——山の中の学校で校則も厳しく、生徒が脱走することも珍しくなかったと聞きます。千葉 ええ、大体逃げます(笑)。僕らの学年にはサッカー部で50人ぐらい入りましたが、入学から1カ月で半分以下になりました。卒業まで残った同級生は16人でした。逃げて戻って来ないことは日常茶飯事でしたよ(笑)。

——本当なんですか!?

千葉 はい。朝のグラウンド整備の時に「あいつがいない」ってなって、監督から探してこいって言われるんですが、絶対に見つからないことは分かっているんで、探しに行ったらふりしてみんなで草むらの中で寝ちゃって。しばらくしてから「やっぱりいませんでした」って報告する。結果、朝練をサボれた(笑)。

——寮生活も大変でした?

千葉 寮から出て下界を見られる(郊外に出られる)のは遠征の時だけ。だから遠征がすごく楽しかった。何が一番楽しかった(高速道路の)サービスエリアのご飯を食べられること。もちろん対戦相手も行きた先も知らされません。理由は、親に知れて試合を見に来ちゃうから。だから、バスで寮を出発して校門を出て、右に行ったら静

岡方面、左に行ったら大阪方面などだけ確認して、あとはもう着くまで寝るだけ。県内の対戦相手は「アイツら三重の山の中で一体何してんだ」って、不気味だったと思いますよ。

——千葉選手はどんなプレーヤーでしたか? 千葉 中学3年で(身長)178センチあって、入学時はフォワードでした。1年生の夏以降にボランチをやり始めて定着しました。ロングパスで遠くに蹴ることは得意でしたが、運動量が売りでした。パスを散らすというより、自分でドリブルしてシュートまで行くタイプ。コンバートに抵抗感はなく、試合に出られたら(ポジションは)どこでもいいと思っていましたし、監督の

やる戦術にうまくはまっていた選手だったと思います。

——練習は激しかったですか?

千葉 アップだけで4対2(のボール回し)を2時間ぐらい(笑)。その後、1対1とか2対1をやって、最後に少しゲームをやる感じ。特に目新しい練習をしていたというわけではないですね。ボール回しは監督も一緒にやって、監督が納得したら終わりました。今では考えられませんが、夏休み期間は1回に5時間ぐらい練習をしていましたね。サッカー部は強化部でしたので、平日は授業が終わって午後2時から暗くなるまで、朝練も5時から4時間ぐらいやって。サッカー漬けの毎日でした。

人として成長できた高校時代 少々なことでは苦労とは思わない

——努力が実を結んで、千葉選手が2年生の時に同校初の全国選手権出場を果たしました。

千葉 当時は4-3-3(のシステムの)中でアンカーを任されていました。チームの特徴は一人一人が頑張るサッカー。今の子どもたちのように深く知ることができたら良かったのですが、当時はサッカーの奥深さを考えることもなく、ひたすら一生懸命に走って戦ってみたいサッカー。当時は(走るスタイルの)国見高校(長崎県)がダントツに強くて、それになぞられて「俺



「あの学校に進学していなかったらプロサッカー選手になっていなかった」。それほど高校のインパクトは強く、大きい



Profile
川澄奈穂美(かわすみ・なほみ)●1985
(昭和60)年9月23日生まれ、神奈川県出身。小学2年時に神奈川県大和市の林間SCレモンズでサッカーを始める。日本体育大で全日本大学女子サッカー選手権大会に2度優勝。2008年にINAC神戸レオネッサ入団。同クラブとアメリカの女子プロリーグのクラブを行き来して活躍。日本代表でも底知れぬスタミナ、スピードに乗ったドリブルからのラインブレイクで脚光を浴び、FIFA女子ワールドカップでは11年ドイツ大会優勝、15年カナダ大会準優勝。23年8月、アルビレックス新潟レディース加入した。昨季に続き今季も主将。157cm、51kg。背番号19。

「全てを受け止める覚悟です。
今シーズンも一緒に戦いましょう！」

「アルビレックス新潟レディース MF 主将」

川澄奈穂美

「ここにはいけない」「辞めるべき」。プロサッカー選手としての矜持を全面に出して、今季に懸ける思いを熱く語った川澄奈穂美。
9月1日、WEリーグカップを皮切りにアルビレックス新潟レディースの2024-25シーズンが幕を開けた。

撮影文●井上和男(編集部)

背中で伝える勝者のメンタリティー

——昨年8月に加入されましたが、チーム始動にやや遅れての合流でした。それから1年がたちましたが、川澄選手にとって新天地はどのようなシーズンでしたか？

川澄 チームが始動して3週間たってからの合流でしたが、試合に入っている状態だったので、シーズン開幕からしっかりといけるという気持ちでした。WEリーグが始まって3年目のシーズンです。自分が入る前のアルビレについては、リーグ1年目からかなり苦戦しているなと思って見ていました。同時に、いいものを持っている選手がいるというのを感じていて、監督が交代したタイミングで自分が入った時には、すごくいい雰囲気プレーしていると感じました。チームは「本気でトップ3を目指す」という目標を掲げていましたが、自分

はそれを知らずに「新潟にタイトルを」と入団記者会見で言ってしまった(笑)。自分の中には「優勝」という思いを強く持っていましたし、実際に加入してみても、そこを目指さなければいけないチームだと、合流して数週間で感じました。カップ戦で決勝まで行けたことは、チームにとってすごく大きなものになりました。トップ3を目指す、タイトルを目指すといっても、過去の成績を踏まえると何となくイメージが湧きにくかったと思います。その中で、カップ戦で決勝まで進めたこと、目の前にタイトルがある試合を戦えたことで、若手選手たちにはとてもいい経験になったと思います。でも「いい経験でした」で終わらせ

るのが一番嫌いなタイプの人間なんです(笑)。得た経験をどのように次へつなげていくのかという課題に、本当に取り組めた1年だったと思います。シーズン前半の成

績も手伝い、後半には「本気でトップ3を目指す」から「本気でタイトルを目指す」と目標が変わりました。自分たちの力で「タイトルを目指す」という高みまで目標を持っていった点はとても良かった。リーグ優勝した浦和レディースに勝つなど、ターニングポイントを自分たちで手練り寄せたシーズンでした。

——一方で、シーズン終盤では連敗もしました。

川澄 そうですね。まだタイトルが見えているのに、競っているチームの背中が見えている中で(勝ち星を)落としてしまった。馬力のなさも露呈したと思います。それが今季改善しなければいけない課題です。試合に出ている選手、出る機会が少ない選手、ベンチメンバーから外れた選手。シーズンを通して全選手がいっつも出ても戦える準備をし続けられないと、リーグ優勝は難しいと

思います。ここは、試合に長く出ている選手だけが調子が良ければいい、というような場所(チーム)ではないので。選手全員が高い意識を持って戦う必要がある、と改めて感じました。

——川澄選手は日本代表としてワールドカップで優勝(2011年)し、クラブチームのINAC神戸では何度もタイトルを取っています。「勝者のメンタリティー」を知っています。このチームにどのように伝えていきたいと考えていますか？

川澄 もともとそんなに言葉で伝えるタイプではないので。昨シーズン、キャプテンを任されて、試合後や試合の前日などに最後に円陣で話す機会はありましたが、伝えたいことは橋川(和晃)監督が伝えてくれていたので。それでもやはりコミュニケーションは大切。練習の中でプレーで示すことはもちろん、必要と感じた場合は伝えるようにしています。それはキャプテンだからというよりは、プロサッカー選手として行う意味合いの方が強い。だからやり続けなければいけないですし、やらなければ自分はこのにいる意味もないと思います。細部にこだわる。それは常に練習の中で心掛けていることです。

——川澄選手の考える「プロサッカー選手としての勝者のメンタリティー」とは何ですか？

川澄 本心に信念を持ってやること。それが大事だと考えています。スポーツは戦う者同士が皆、勝利を目指していますが、勝ちがあれば負けもあります。負けた時にそれを次にどのように(勝利へ)転換させるかがものすごく大切です。(転換の)プロセスを大切にしないと、絶対に結果は